

ジェンダー・センシティブを育む国語教育の実践

秋吉和紀

一 学習者の抱える課題

国語教育という分野に限定してみても、ジェンダーに関する研究は多くの積み重ねがある。そのため、「ジェンダー・センシティブを育む国語教育の実践」というタイトルを見て、真新しさを感じず、「何をいまさら」という印象を受ける者もいるかもしれない。しかし、実際に教育現場に身を置くと、こうした実践を、また、こうした研究を耐えず続けていくことの必要性を、日々感じる。

高校生の学校生活の中の発言を注意深く聴き取ると、ジェンダーに関わる発言が実に多いことに気がつく。一例として、高校生が、「女子力」という言葉を多用して、互いの「女子力」の高さを測ったり、「女子」として不足のあるところを互いに駄目出しをしたりしていることが挙げられる。一見無邪気にも見える光景だが、こうしたことがいきすぎると、勝ち組／負け組、イケテル／イケテナイなど、極端な二分化¹が起こり、さらには、こうした二分化の優位に置かれた者、つまり「女子力」なるものを有する者が、劣位に

置かれた者に対して「女子力」発言を駆使することで、抑圧的に働きかけていくということが起こってくる。これは様々なメディアからジェンダー規範を獲得し、それを主体化（＝隷属化）した者が、そのジェンダー規範をもとに他者を抑圧していると言い換えても良いだろう。

また、これ以外にも、高校生の会話からは、同性愛に対するからかいや、「男らしくない男」、「女らしくない女」に対するからかいなど、セクシャル・マイノリティに対する不用意な発言も多く聞かれる。近年、テレビやインターネット上で、旧来のジェンダー規範を越え出たセクシャル・マイノリティが以前にも増してショーアップされている。しかし、先行研究でも多くの指摘があるように、それは社会がセクシャル・マイノリティに対して寛容になってきていることを表わしているのではない。事態はむしろ逆で、ショーアップされたセクシャル・マイノリティを「笑い物」、「見世物」にすることで、旧来のジェンダー規範を強化する方向に働いているのである。高校生がセクシャル・マイノリティに対して不用意な発言をしているのは、彼・彼女らを取り巻くそうした言説状況が大いに関係

しているだろう。

さて、以上の例から見えてくる学習者の課題は、①誰しも何らかのジェンダーの枠組みに規定されて生きていることに、彼・彼女らは無自覚であること、②自身の依拠するジェンダー観が他者に対して抑圧的に働くこともあるということに無自覚であること、である。

ジェンダーにあまりに関心である高校生の課題に対する応答として、国語の授業を通して、高校性に対してジェンダーに対する意識づけを行うことを目指し、本単元を考えた。

二 「ジェンダー」という概念

実践の報告をする前に、今回の実践のテーマである「ジェンダー」という言葉について確認しておきたい。

「性」の区分に関しては、次の三つのものが一般的なように思う。²一つ目は、「生物学的な性差」(= sex)。二つ目は、「社会的・文化的な性のありよう」(= gender)。三つ目は「性的指向性」(= sexuality)である。

このうち、私が主に対象とするのは「ジェンダー」である。社会の中での性役割を意味するジェンダーは、各個人の性自認(= ジェンダー・アイデンティティ)にも深く関わっている。自分の社会的・文化的な性のありようにあわせるかたちで、自身の身体的な性を転換する者がいることを考えれば、自分が男であるか、女であるかを自己同定するジェンダー・アイデンティティは、身体的性別に

先立つものであり、我々の存在の根幹を成すものと言つてよい。

ところで、自分が男であるのか女であるのか、あるいは、そうした男/女の二元論にとどまらず、自分の性のありようがいかなるものであるのかを私たちが自己決定するためには、「男」とはどういったものなのか、「女」とはどういったものなのかをあらわす規準や枠組みのようなものを必要とする。私たちは、「男/女はこうあつてほしい」といったような他者の欲望や、「男/女はこうあるべき」といったような社会的当為によって象られるジェンダーの規準や枠組み抜きには、自身を男であるとも、女であるとも表現することはできない。こうしたものを常に参照しながら、私たちは自身のジェンダーの一貫性を保っているのである。

以上のことは、フーコー、バトラー、クリステヴァの論をはじめ、多くのジェンダー研究によつて明らかにされてきたことである。また、他者の欲望や社会的当為によつて象られたジェンダーから逸脱した者達が、はつきりとわかるかたちでも、あるいは、暗黙の内にも、何らかの形で抑圧されていることを明らかにしてきたのも、こうした一連のジェンダー研究の成果である。

三 実践の目標 ジェンダー・センシティブの育成

本実践を行ったのは、2015年の9月から10月のはじめ頃で、全体の構成は6時間で行った。対象は高校3年生、1クラス36名(うち女子24名、男子12名)である。本校(関西大学第一高等学校)

は私学の大学併設校である。一学年のほとんどの者が内部推薦で関西大学へ進学するのだが、実践を行ったクラスは、国立公立大学や他私大への進学を第一志望とする者達が集まるクラスである。

実践にあたって目標としたのは、「ジェンダー・センシティブ」を育むことである。ジェンダー・センシティブとは、アメリカのジェンダー研究者の一人であるジュエーン・マーティンが提唱する概念である。精神科医の斎藤環がこの概念を端的に表しているの、ここに引用する。(下線は稿者が付した。)

ジェンダー・センシティブという立場は、差別につながりうるカテゴリーをただ消去するのではなく、そのカテゴリーの重要性を尊重しながら、カテゴリーが及ぼす作用を注意深く観察し調整していくようにする立場なのだ。

(『所有する男 関係する女』講談社現代新書、2014)

ジェンダー論は、いきおい「ジェンダー」という枠組みの消去や解体を目指すことにつながる。たしかに、「ジェンダー」は差別や疎外といった状況を作り出す「悪しきもの」であるかもしれないが、しかし、「ジェンダー」は私たちのアイデンティティーに密接に関わり合っている。繰り返しになるが、私たちはジェンダー規範という一定の枠組み抜きには、自身を「男」であるか、「女」であるかを決めることができないのである。つまり、私たちは、自身の

性自認を決定する上で「ジェンダー」を必要としている。そのため、それを消去・解体しようとすることは現実的ではない。

こうしたジュエーン・マーティンや斎藤環の論をもとに、私は本実践の一つ目の目標を、普段は意識されることのない「ジェンダー」を学習者に意識づけることとした。これは文字通り、社会で生み出される「ジェンダー」というものに、「センシティブな」感覚を持たせることである。学習者自身が、何らかのジェンダーに規定されて生きているということに自覚的になり、自分たちの中にあるジェンダー規範と自分たちとがどのように付き合っていくのかを考えていくことを、目標とした。二つ目の目標は、社会のジェンダー規範が、また、学習者が内面化しているジェンダー規範がいきすぎている場合には、学習者がそれを自分自身で「調整」できるようにすることである。

こうした二つの目標を達成するために、『列女伝』の読み取りを通して、学習者にトレーニングを行った。

四 実践の報告 『列女伝』を用いたトレーニング

『列女伝』を読む前に、概論「近代」と階層的二項対立」を行っている。この概論は、本実践でテーマとなった「ジェンダー」論だけではなく、本実践とは別に行われた「理性主義批判」、「科学技術批判」など様々なテーマの單元にも繋げるように意図して行った概論である。

表1

近代で価値がおかれたもの 近代で推進されたもの	近代で価値がおかれなかったもの 近代で排斥されたもの
理性	感性、想像、野生
心、精神	身体、肉体
普遍化、画一化	多様化、多元化
国民国家、多数（民族、言語）、 大衆	個人、少数民族、少数言語
男性	女性
成人（大人）	子ども
対象化（＝主観、客観の分化）	世界との一体化（＝主客の未分化）
科学技術、人工、文明、文化	自然
都市、文明	田舎、未開、野蛮
意識	無意識、夢
内、中心	外、周縁
効率、合理性	遊び

表1はその概論で扱ったものである。表1を示しながら、近代が推し進めてきたこと、近代が排斥したことを学習者に提示し、そのうち特に「男／女」に着目させたいので、「ジェンダー」とはどのようなものかを考えていくことを学習者に示した。

次に見ていったのが、メインの教材である劉向の『列女伝』³で

ある。『列女伝』は前漢末に儒者劉向の撰によって成った書物で、教育書として、また、文学書や史書として前近代の東アジア社会で読まれた。⁴「教育書」として、というのは勿論、「女訓書」として、である。他の説話形態の多くの書と同様に、『列女伝』は、ある特定の価値観を前提とし、それに適ったものを称揚し、それから外れるものを貶謗するものである。『列女伝』においてそうした価値観が何かと言えば、儒教的な（良き女性）観である。この『列女伝』は、ジェンダー規範を生み出す生々しい現場を確認することができるものであり、また、高校生に対してもそれがわかりやすく提示できるものであるため、今回の実践のメインの教材として選んだ。

学習者にはまず、「衛霊夫人」、「孫叔敖母」の二話をそれぞれ読ませ、『列女伝』にあらわれる「女性」の姿を考えさせた。次に挙げるものは、「衛霊夫人」を読ませた際に、衛の霊公の夫人の后としての在り方はどのようなものか、という問いに対する学習者の意見である。（学習者が書いた文章については、訂正を行わず、そのまま提示する。）

- 1 夫である君主を心から尊敬し、妻としての立場をよく分か
かっており、夫を献身的に支える存在。（女）
- 2 夫を献身的に支え、夫の慶事を自らのことのように祝福す
る、夫に対して忠実である在り方。（女）
- 3 夫をあくまでも立てて、そして自分自身はあまりでしゃば
らないように気を配るといふ在り方。（女）

4 多くの知識と機転をきかせられるような賢さを持ちつつも常に国や君主、はた又は夫のことを思いやり、敬うことができるように心が清らかである在り方。(男)

5 筆者は、女性の在り方として、視野が広く、柔軟な思考を持ちつつも、夫にしっかりと敬意を払っているのが望ましいと考える。(男)

6 霊公の言葉に対して、機知に富んだ受け答えをしていることから、男性に寄り添い、時に的を射たような発言をすることで、男性を支えていく姿。(男)

他の学習者に関しても概ね以上のような意見を述べている。意見の4にある「心が清らかである」という記述は、本文中に明示的に記されている情報ではない。この学習者の記述を通してわかることは、学習者は彼・彼女らを取り巻いている表象空間の中で交わされ、また彼・彼女ら自身も内面化している〈良妻賢母〉言説を参照し、この霊公夫人の姿を見ている、ということだ。

さて、この『列女伝』の締めくくりとして用意したのは、「殷紂姫己」および「夏桀末喜」である。両者は、伝説の悪女にそのかされた伝説の悪王が、伝説の聖王に打倒されるといったように、話が共通している。

これまでに読んできたのは、良き后、良き母といった、儒教的〈良き女性〉を称揚する話であった。「殷紂姫己」で登場する女性、姫己は、そうした儒教的ジェンダーの枠組みを越えた結果、国を滅

ぼした者と断じられている。学習者には、まず、「殷紂姫己」を読ませたあと、次に、「殷紂姫己」と類似した話である「夏桀末喜」を読ませた。そして、「殷紂姫己」、「夏桀末喜」との共通点を挙げさせた。次に、「姫己」及び「末喜」と、「衛霊夫人」を比較し、「姫己」や「末喜」のどのような点が〈悪后〉として評価されるのかを考えさせた。

その後、「紂王」、「桀王」の失敗のポイントを挙げさせ、最後に、学習者に対して発問で揺さぶり、感想を書かせている。その発問の内容とは以下の通りである。「姫己」や「末喜」は確かに、政治を混乱させ、民を顧みず、人命を軽んじている。その点については、現代の倫理観と照応しても、ほめられるものではないが、しかし、自分の意志で行動、発言をする姿まで否定しても良いのだろうか。これが、発問の内容である。「姫己」、「末喜」は、政治的混乱を招き、人命を軽んじたことも非難されているだろうが、「衛霊夫人」などの〈良き女性〉像を参照すると、「姫己」、「末喜」が「女必従男」という儒教的ジェンダーを越えて、男性に抛らずに発言・行動しているところも同時に、「列女伝」では悪評のポイントとなっている。そうした『列女伝』の「女必従男」の価値観を相対化する機会を学習者にもたせるため、そうした発問をし、学習者に感想を書かせた。「殷紂姫己」および「夏桀末喜」を見る限りは、姫己や末喜の主体性を読み取ることはできないが、本実践は「ジェンダー規範（感覚）の調整」を目標としているため、このような発展的な発問を行った。以下、発問に対する学習者の意見である。（省略や下線を付すことは、稿者が行ったものである）。

7 やったことは最低でも、(姐己や末喜が) すごくかっこよく見えてきました。特に姐己がとても好きになった。(中略)
好き勝手に民を困らせたりしないで国が良い方向に進むようなことをしていたら、本当にかっこいいと思う。(女)

8 姐己や末喜は「悪女」であるという前提でこの話を讀んだので、やったこと全てが悪いことであつたと思ひ込んでいたが、ジェンダーの話聞いたとき、この二人は女性の立場に窮屈さを感じており、やり方は間違つていたかもしれないが強い女性を周囲に示したかたではないかと思う。(女)

9 女性が政治に介入し、言いたいことを言うことを悪し、だまつて男性に仕えることを善とするような固定観念が、若者とされる私の中にもあるのだと改めて驚きました。男女平等とされる現代の中で育ってきたにも関わらず、これはシヨックでした。霊公夫人のような女性は、一昔前までの古き良き時代に「良妻賢母」とされてきたような奥ゆかしい女性です。私も心のどこかで、だんなさんの言うことを笑顔で聞き入れ包み込んであげられるような人になりたかつたのだとおもいます。(女)

意見の7、8は、『列女伝』に表れる〈良妻賢母〉の言説状況を相対化する視点を、学習者が獲得したことを示すものである。特に、8に関しては、学習者は、最初は『列女伝』の語りに寄り添う形で〈良妻賢母〉言説を主体化していたことを表明している。9に

関しては、〈良妻賢母〉言説を主体化・内面化している自分自身を自覚し、そうした自分を客観視するものとなっている。「だまつて男性に仕えることが善」という自身の中のジェンダー感覚を調整することに成功していると言えるだろう。

このように、〈良妻賢母〉言説を相対化するもの以外に、別の角度からの意見も多数ある。例えば、その内の一つは、『列女伝』を男尊女卑と安易に批判せず、劉向はその時代に広く浸透する価値観(言説)を、正しく内面化し、表現しているにすぎないという意見だ。以下、学習者の意見を示す。

10 この時代の価値観自体は戦国の世の中で国を守る為に武器を身につけ外で闘うのは夫、家の中でそんな夫を支える為に家事などを行うのは妻、というそれぞれの体力的な問題で、男の人は男の人が得意とすることを行い、女の人は女の人が得意とすることを行う方が、その国の力は強く大きなものになつていくという考えから形成されたものなのだろうと推察されるので、それは批判の対象にはならないと思います。(女)

五 評論教材を用いた発展学習

さて、これまでのところで、『列女伝』で学習者の内にジェンダー・センシティブの感覚は育まれたように思う。目標はほぼ達成

されていると感じるが、次に評論へと話を進めた。学習者の意見・感想を読む中で、学習者に広く見られた意見は次の二点である。

① 現代は昔と比べ、男尊女卑のジェンダー対立は解消されてきているという意見。

② 家庭内、社会内での女性の権威を今以上に高めようという意見。

①の意見をより多角的に検討するため、菊池夏野「ポストフェミニズムと日本社会」⁶を教材化し、読ませた。本文は、「女子力」・「婚活」・「〇〇系女子」という言葉の分析を通して、男／女を差異化する言説は、現在でも産出されていることを提示している。男／女を差異化する言説は、「亭主関白」、「男は仕事、女は家庭」などの古典的で露骨なものではなく、彼・彼女らに身近な語彙の中にも存在することを、この評論を通して学ばせた。(以下、学習者の意見。下線、省略は稿者による。)

11 「女子力」には実は古典的な女らしさが含意されているという内容は、非常に身近な例であり、実感があつた。「女子力」が高い女性の方が社会的に生きやすいから、という理由ももちろんあるが、女性自身が古典的な女らしさを持つ自分に憧れてしまっていることも理由の一つだと思う。(女)

12 「男性が思う女子力とは」古典的な「女らしさ」とあまり

変わらない。ここを読んで「確かに」と納得しました。(中略) 現代の日本においても、古来の儒教観を重視していた時代からあまり進歩がないように感じます。(女)

13 一般的に「女子力」が高い方が優れていると定義づけられ、女性たちは「女子力」を上げるために努力をしています。普段何気なく使っている言葉が、(古典的な)ジェンダー規範をより強固なものにしているんだと気づかされました。(女)

14 以前から「女子力」という言葉に違和感を感じていた。具体的に何をするのか分からず、ただ、女の人がするイメージがある行動やふるまいをすることが「女子力が高い」と評価されて、女のイメージと違う行動をすると「低い」と言われるのは、文章にあるように、古典的な「女らしさ」を求めているように感じる。(女)

11～13の意見は、『列女伝』でのトレーニングの成果が見てとれる。いずれも『列女伝』を用いた学習を参照しながら、意見を述べているのだろう。13、14の意見は、「女子力」というジェンダー規範が彼女たちに抑圧的に働く可能性があることを示唆したものと なっている。

さて、先述した②「家庭内、社会内での女性の権威を今以上に高めようという意見」に対しては、上野千鶴子『差異の政治学』⁷をとりあげ、教材化し、学習者に提示した。本文はジェンダーを、

「男・女」のように分割された二項的な関係ではなく、男/女を分割、差異化する運動そのものと捉えようとする。その際、その分割、差異化には「階層性」が組み入れられているとする。

②の意見の危うさは何かという点、男性優位とされてきた男/女の二項対立について、「差異化による非対称性（階層性）」を解体することなく、「男」、「女」の項の入れ替えを行うだけで、平等が達成されると考えるような、形式平等論に陥る可能性があることだ。上野千鶴子の評論を留意したのは、学習者が抱く形式平等論へ応答するためである。

六 結びにかえて

ここでは紹介しきることができなかったが、今まで示した意見以外にも、学習者は多種多様な意見を挙げた。「リケジョ」という言葉は、そもそも「理系は男子」ということを暗に前提としている「だとか」、「イクメン」という言葉が特別な意味を持っているうちは、イクメンを推進する運動は成果を上げていない」だとか、本実践で獲得したセンシティブな感覚を十分に發揮し、身近な社会問題に対して異論や提言を行っていた。

こうした状況は授業におさまらず、休憩時間、終礼後などあらゆる場面で生徒相互の、時には教員を巻き込んだ「討議」的状况を生み出していった。これは授業者としては予想外の出来事であった。ここまで教室が活性化した理由は、「自分が何者であるか」を考えることを強く迫られる高校3年生にとって、ジェンダーが自身のア

イデンティティーを考える上で重要な要素の一つであったからだと、私は考えている。

ハーバードの描く「市民社会」は、諸個人がそれぞれの私生活に根ざしながら、「新たな問題状況」を敏感に察知する豊かな感受性や危機意識を持ち、「討議」を経て、生活世界の民主的な再生産を促すものであった。数年後に「市民社会」の一員となる学習者が、今回の実践で得たセンシティブな感覚を大いに發揮し、これからも自身の（あるいは社会の）ジェンダー規範を必要に応じて調整していくことができればと、授業者は願っている。

付記

本稿は、2016年8月に行われた第57回広島大学教育学部国語教育学会での発表を加筆・修正したものである。質疑応答の場や、発表後の意見交換の場において、多くの方からご意見をいただき、また、本実践の教材の候補となるような文章をご教示いただいた。また、別の形で学習者にジェンダーを考えさせる実践をしていきたいと思う。ご意見・ご教示いただきました方々に対して、この場をお借りして感謝申し上げます。

注

- 1 他にも「リア充／非リア充」など、こうした二分化は枚挙にいとまがない。
- 2 「性」の区分に関して、本文中では三つの区分としたが、これらに加え、「表現する性」を区分の一つとして考えるあり方もあ

る。例えば、生物的な性も男性であり、ジェンダーとしても「男性」であると自認し、性的指向性も異性愛者である者が、女性のファッション（＝異性装）を行うこともあるからだ。

3 劉向『列女伝』（山崎純一 注・解説、明治書院）による。

4 劉向『列女伝 上』（山崎純一 注・解説、明治書院、1996）1頁。

5 「衛霊夫人」は『列女伝 中』（山崎純一 注・解説、明治書院、1997）三四九頁～三五四頁を、「孫叔敖母」は同書、三三八～三四二頁を教材化した。授業プリント、資料等は紙幅の都合により割愛する。

6 『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」 格差、文化、イースラーム』（越智博美、河野真太郎 編、彩流社、2015）所収。菊地夏野「ポストフェミニズムと日本社会―女子力・婚活・男女共同参画」を教材化した。

7 上野千鶴子『差異の政治学』（岩波書店、2002）第1章「差異の政治学」を教材化。

（関西大学第一中学校・高等学校）